

2022年度 霞が関政策提言ツアー 実施報告書

実施日：2023年3月10日(金)

意見交換：財務省(主計局)、水産庁(農林水産省)、総務省、国土交通省

参加者：赤井ゼミ学生20名、引率教員2名(赤井¹・足立)



¹ 連絡先：赤井伸郎（大阪大学国際公共政策研究科教授）akai@osipp.osaka-u.ac.jp

目次

1. 政策提言ツアー企画の経緯.....	2
2. スケジュール.....	3
3. 写真.....	5
4. 学生感想・コメント.....	8
4.1 財務省でのプレゼン.....	8
4.2 水産庁 増殖推進部 栽培養殖課 養殖企画班でのプレゼン.....	14
4.3 総務省自治行政局住民制度課マイナンバー制度支援室でのプレゼン.....	19
4.4 国土交通省 道路局 国道・技術課道路メンテナンス企画室でのプレゼン.....	23
4.5 今回の政策提言ツアー全体への感想および、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場（中央省庁、地方自治体、その他）やそのあり方についての意見・希望	27
4.6 阪大(東京) オフィスの印象.....	31
5. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント.....	32

1. 政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が2022年度に執筆した論文が、ISFJ（日本政策学生会議）において、最優秀賞を受賞した。論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行うこととした。受賞した論文およびその他の班の論文は、水産庁（農林水産省）、総務省、国土交通省の政策にかかわるものであり、その政策担当者と議論する機会を持つことにした。本ツアーに御協力いただいた多くの皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

2. スケジュール

霞が関政策提言ツアー

3月10日(金)【午前パート】

1. 日時: 2023年3月10日(金)9時40分~12時 (タイムテーブルは下記)

2. 場所: 中央合同庁舎四号館 四階 第二特別会議室(対面方式)

3. 参加主査、各省庁窓口について

(1) 大阪大学参加者:ゼミ生21名+教員2名

(2) 財務省参加者:調査課:松本課長、岡本補佐、小嶋係長、玄番係員

○予算係対応者

テーマ	登録者
①魚類養殖の経営改善による発展に向けて	農林係 佐藤主査
②橋梁メンテナンスの確立を目指して	国交係 谷口主査
③マイナンバーカードの更なる普及に向けて	総務係 高橋主査 デジタル係 若松係長

4. 当日タイムテーブル:

時間	場所	イベント
9:35	財務省正門前	大阪大学一同集合→会場へ
9:40-10:20	中央合同庁舎 4号館 共用第2特別 会議室	プレゼンターマ①漁業班(農林2係 佐藤主査) <時間配分:挨拶5分+発表20分+質疑15分>
10:20-11:00		プレゼンターマ②橋梁班(公共総括係 谷口主査) <時間配分:挨拶5分+発表20分+質疑15分>
11:00-11:40		プレゼンターマ③マイナンバー班(総務係 高橋主査) <時間配分:挨拶5分+発表20分+質疑15分>
11:40-12:00		調査課長との意見交換 <時間配分:挨拶5分+説明5分+質疑10分>
12:30-13:00	財務省食堂	ランチ

対応:主計局調査第6係 小嶋 03-3581-4111(5419)/直通03-3581-4186

3月10日(金)【午後パート】

午後各省庁訪問 (<時間配分:挨拶 5分+発表 20分+質疑 20分+予備 15分>)

13:30-14:30 プレゼン@水産庁 増殖推進部 栽培養殖課 養殖企画班

場所:農林水産省 8階(水産庁フロア)の中央会議室

連絡先:水産庁 増殖推進部 栽培養殖課 養殖企画班 小川 大樹(Ogawa Hiroki) 電話:03-3502-8111 (内線 6820)



14:45-15:45 プレゼン@総務省自治行政局住民制度課マイナンバー制度支援室

場所:中央合同庁舎2号館(総務省)地下2階 第2・第3会議室

連絡先:総務省自治行政局住民制度課マイナンバー制度支援室 個人番号カード係長 瀧口 健太
TEL:03-5253-6111 (内線:26601)



16:00-17:00 プレゼン@国土交通省 道路局 国道・技術課道路メンテナンス企画室

場所:中央合同庁舎3号館(国土交通省)1階国会側の待合コーナーで集合

連絡先:国土交通省 道路局 国道・技術課 道路メンテナンス企画室 課長補佐 谷 成二(Tani Seiji) <080-4234-1446>



3. 写真

財務省訪問〔午前〕と意見交換

農林水産係



総務係



国交係



調査課長とともに



各省庁との意見交換会(午後)

水産庁



総務省



国土交通省



4. 学生感想・コメント

4.1 財務省でのプレゼン

財務省への政策提言での発表・議論（自分の班および、他の班）から感じたこと・学んだこと、財務省のハードの印象・財務省のソフトの印象（担当者）など

1. 発表における議論の中では、財務省の方ならではの鋭い指摘が多々あり、特にシステムの実行と金銭的な効果には時差があり、そこも考慮に入れなければならないという指摘が興味深かったです。理想論だけを語らずに、現実を分析して受け止めて、その上で今できる最善の政策を打ち出していく財務省で働く人々の姿勢を肌で感じることができました。今何も起こっていないから大丈夫だとする考え方と、何か起こってからでは遅いとする考え方という相反する2つの考え方の中でより良い選択をしていくことの難しさというものも感じました。



2. 最も印象的だったことは、普段実際に政策を考えている方たちが私たち学生の意見に耳を傾け、考え方や方向性について共感してくださったことです。中でも、EBPM に基づくプレゼンについてお褒めいただいた時には、一年生の頃から国際公共政策学科の授業で教わってきたことが活かしているのだと感動しました。また、私たちには考え及ばないマクロの視点からのご指摘をいただき、このことを来年度の論文執筆に活かしていきたいと思いました。
3. 体調不良のため、ほとんど話を聞いていないので感想なしでお願いします。すみません。
4. 財務省の会議室の中でプレゼンをするという貴重な機会をいただけてとても光栄でした。想像していたよりもずっと煌びやかで綺麗な会議室だったのでとてもテンションが上がりました。また発表内容に関しては、今年はメインで論文を書いたわけではありませんが、1年間の集大成を実際に働いている官僚の方に聞いていただくというのは



嬉しいものでした。きっと来年はさらに嬉しいものになると考えると、来年の提言ツアーがとても楽しみにになりました。

5. たとえ既知の内容であったとしても、プレゼンを聞いてそこから学ぼうとする姿がとても印象的で、自分の意見をより充実させたり、相手に適切な質問・提案をしたりする上でとても大切な姿勢だと感じた。拡大する財政赤字を前にして、政策の効果が重視されるが、フューチャーデザインの考え方からすると、初期投資などで現在は赤字の政策でも長期的に見ると、利益を回収できる場合もあるので、様々な視点から政策を判断し、提言したいと感じた。
6. 日本政府の省庁の財務を担う方々のお話を直接伺うことができ、非常に貴重な機会となりました。論文のEBPMの構成、すなわちロジックがつながっているかどうかに留意すべきだということを改めて学びました。また、調査課長の松本様からは、日本経済を持続可能なものにするために、お金や予算に制約がある中でより良い効果を挙げるために日々努められていることを教えていただきました。将来に対して責任を持てる仕事をする、フューチャーデザイン等長期的な視点で仕事を進めていくという信念に触れることができ、自分のこれからの働き方、生き方の指針をいただきました。
7. 頂いた質疑やコメント全体を振り返って、まずはじめに感じたのは、政策決定には想像を超えるほどたくさんの事柄が複雑に絡み合っていること、そしてそれを十分に検討された上で判断が下されているということです。マイナンバー制度については、「取得が任意で始まったが故に普及が思うように進まなかった」。促進策をとるにも「金銭的な効果が現れるのには時差がある」一方で「効果のあるものから効率的に進めないといけない」という点が納得と同時に難しさも感じました。
8. 補填制度の割合を変更することについて、財務省の方も同じように考えていたというのには驚いた。また、加入すればほぼ確実に補填がもらえる現状に問題意識を持っておられるところにも共感した。畜産分野の質問をした際にも専門分野外のことまで推測を聞き、見識の高さが伺えた。最後の財務省のプレゼンを聞いて、結局、現状の解決策がなく、普段から議論していくことで、糸口を探していくという方向性であることが分かった。何もしないよりましであるが、同時にそれしかできないと知り少し悲しかった。
9. 自分の班の発表に対する谷口主査のお話を聞き、道路分野の予算全体が莫大である一方、例えば一つ一つの橋梁の補修にかかるお金は100万円単位のものもあるということで、支援のメリハリ付けや、国がどこまで支援する必要があるのか、についてさらに考えさせられる機会になりました。他の班の発表に対する担当者の方の、予算を担っているからこそその様々なご意見を伺うことができたのも大変良い機会になりました。日本の今の財政状況が持続可能かどうかについては色々議論があるというお話でしたが、どれだけ危険な状況かを国民に訴え続け、国民の理解を得ながら財政を健全化させよ

うと努める姿勢を、国内にも国外にも示し続けることが大切であると改めて学びました。

10. 発表・議論においては、複雑に入り組んでいる道路は管理者もさまざま、お金の使い方が難しいといったお話が、現場の視点に気づききっかけとなった。財務省のハードの印象としては、まず重厚感のある建物だと感じた。そして、内部が思ったよりも広くて、1人では議論をした部屋までたどり着けないぐらい、スケールの大きな建物で、ワクワクする気持ちがあった。ソフトの印象としては、物腰の柔らかい方々だという印象を受けた。学生の発表に対して、良いところをたくさん褒めていただいた後に、貴重なご指摘をいただき、「これからの政策を一緒に考えていこう」というようなスタンスを感じて魅力的だった。
11. まず自分の班に関して、論文を書いた時と状況が変わり現場の方にとってはもうあまり参考にならない提言だったかもしれないが、それでも私たちの提言に対して真摯に疑問をぶつけてくださり良い議論になったのではないかと感じる。また、広報の提言はデジタル庁や総務省が実際に最近力を入れている取り組みだと聞いて、自分たちの考えた提言が実際の現場の方の答えと少し似ていたということを知り、嬉しかった。他班の発表に関しては、どの担当者の方も自分の担当領域について相当深い知識をお持ちで、真剣にその分野をよくしようと日々努力されていることが伝わった。
12. 財務省と言えば、省庁の中でも花形であり、非常に優秀な方々がいらっしやると伺っていたため、発表や質問対応において非常に緊張していたが、物腰柔らかく、本質をついたアドバイスや質問をして下さり、本当に深い学びを得ることが出来た。特に、これまで各省庁や財務省の中で議論されてきたことを踏まえて発言して下さっていたため、ヒアリングや事前調査だけでは分からなかった生の声をお聞きすることが出来、非常に興味深く思ったと同時に、更なる研究やこれからの人生に取って非常に有益な経験が出来たと感じた。
13. 学んだことは2点あります。1点目は、財務省の方の人柄の良さです。私たちの政策提言に対して、真摯に向き合ってください、また適切なフィードバックをくださり、大変勉強になりました。2点目はまだまだ考慮しなければならない点がたくさんあるということをおぼせてもらいました。私たち自身も、実現可能性を詰めていたと考えていたものの、フィードバックを通して、他にもたくさん考慮すべきところがあるのだと感じました。財務省の印象に関してですが、堅いイメージがあったのですが、穏やかな方もたくさんいらっしやるのだと感じるとともに、調査官の方のお話から、視座の高さも感じ、改めて国を担う方の責任感とお人柄の良さを感じました。
14. 1番強く感じたのは、「学生が思いつくようなことは財務省もとっくに思いついているが、実行するのが難しい」ということです。論文大会で求められるように、実現可能性を度外視したような学生ならではの視点も必要なかもしれませんが、やはり私たちが今後社会で学んでいくべきなのは「どのように実現するか」という点なのだと感じま

した。自分の班の発表としては、論文執筆が終わってから情報をキャッチアップできていなかったのも、令和5年度水産庁予算の1割強を漁業経営セーフティネット構築事業が占めていることを初めて知り、衝撃を受けました。偶然、財務省の方々が今年注視していた事業について研究できたのは運がよかったと思います。

15. 財務省の方々は、各省庁の中で最も実現可能性に拘っていらっしゃるという印象を受けました。これは財務省が実際の政策の予算を管轄しており、実現可能性の検証をしなければならない部署だからだと思われそうですが、マイナンバー専門人材の民間からの派遣政策に関して鋭い質問を連続的に飛ばされた際にそれを強く実感しました。財務省の官僚という日本でもトップクラスに優秀な方々とお話しできた機会は、それそのものに大きな価値があり、自分を成長させたいへん有意義な経験だと感じました。
16. 政策を作っていくことの大変さや地道さをひしひしと感ずることができました。国の経済や人々の生活を変えよう、ルールや制度を作っていくという大きな意味があり、そこばかりに着目することが多いです。しかし、実際にそのうちの一つを完成させ、評価され、審査され、さまざまなことを経て施行されるまでに、考えることや苦勞することが非常に多いなと感じました。財務省のハードの面については、もう少しデザインをよくすれば良いのではないかと思いました。会議室の配線が丸出しになっていたり、内部が無機質なもののばかりであったりと感じたので、働く環境として、より改善が見込めるのではないかと思いました。
17. 最も印象に残ったことは、私たち学生からのあらゆる質問に対しても「日本のためには」という観点からご回答いただいた点である。国家公務員であるため当然と言えば当然ではあるが、財務省の方々は「予算」というあらゆる取組に必要なものについて思考を重ね、日本がより良くなるために日夜議論を行っているということが実感できた。財務省の方々はとても頭が切れる一方、日本への愛が溢れる情熱的な方でもあるという印象を受けた。
18. 各省庁担当の主査の方のコメントを聞いて、私たちが考えてきた要素は既にきちんと議論された上で現在の政策が実施されているのだということを実感しました。特に、マイナンバー班へのコメントで仰っていた、「財務省としては当然効果が高い物に絞って予算をつけたい」というお話が印象に残っています。財務省は、理想と現実のバランスを見ながら各省庁との調整をするという大変な仕事をしているのだと感じました。また、どの方も仕事に対する厳しさを感じましたが、非常に物腰が柔らかく、外柔内剛であると強く感じました。
19. 道路メンテナンス予算担当者のお話から1本の道路には多くの利害関係が複雑に絡んでいることを知りました。劣化度合いだけでなく、住民の意見やその道路の重要性など様々な要因を考慮して優先順位をつけなければならず、限られた予算をどう配分するかで頭を悩ませているというお話から道路メンテナンス事業が進まない理由の一端を垣間見たように感じます。予算を配分する立場の方から道路メンテナンス事業の実状

を伺ったことで新たな視点を得ることが出来ました。財務省のハード面の印象は、重厚な造りで正面入口や赤絨毯の階段に歴史を感じる事が出来ました。一方で、午後に訪問した総務省と比べると建物設備の老朽化や廊下の照明の暗さを感じました。ソフト面では、昨年度は休憩時間に官僚の方と一対一でお話する機会があり人となりに触れることが出来ましたが、今年度は時間の都合上交流の機会が持てず残念でした。全体としましては、学生の発表や質問に誠実に向き合っている印象を受けました。

20. 国家の予算をつかさどる省庁ということもあり、政策提言の予算面で非常に貴重な意見をいただくことができてよかった。また、個人的な話になるが、日本の経済についてこのまま借金をし続けても大丈夫なのかという不安、疑問があったので、発表後に松本課長から日本の財政について貴重なお話を聞いたことも非常に価値があった。建物の印象としては、去年と比べて工事している場所が多いと感じた。橋梁班であったので、そういう部分に目がいった。

財務省食堂のランチについて。(阪大のいろいろな学食と比べて)。財務省職員の職場環境について感じたことも。

1. 職員の方のほとんどが男性であるという印象がとても強いです。女性の方もいらっしゃいましたが、数人でした。ランチは、美味しかったです。少し量が少ないように感じました。必ずスーツを着用しないといけないのかと思っておりましたが、オフィスカジュアルの格好の女性やスニーカーを履いている人も見かけたので、自由度があって、財務省への個人的な印象が少し変わりました。
2. 非常に混み合っている点では阪大の学食と同様でしたが、自分で好きな料理をトレーに載せられる学食とは異なり、ある程度メニューが決められている点で違いを感じました。職員の方々の入れ替わりも激しく、こちらの方が早く食事を終わられるなと感じました。
3. 食堂の雰囲気や、メニュー、価格帯は、阪大の生協食堂と似ていたように感じた。もちろん、省内には用途や使用者の層が異なる様々な食堂があるのだろうが、霞が関の職員



の方々が我々に親しみやすいランチをしているのが意外だった。また、食堂内は和気あいあいと会話しながら食事する職員の方が多く、よい雰囲気だと感じた。

4. 財務省の食堂だけでなくいろいろな面を見て、学校に近いなという印象を受けました。国のために朝から晩まで必死に働く官僚の方々の労働環境と思うととても遠く感じていましたが、この点で官僚という職に親近感を抱くことができました。
5. 私は中華そばを食べたのだが、値段がとても安いのに味がよく、とてもコスパがよいなと感じた。食器の回収は大阪大学同様コンベアで、人件費の削減につながっているなと感じた。
6. シンプルかつ、多くの人に根強い人気を持っているメニューがそろっているなと感じました。私はラーメンが好きなので中華そばと迷ったのち種物ラーメンをいただきました。とても美味しかったです。男性の方も女性の方もきびきびと動かれていて、それでいて食堂ではリラックスした雰囲気で談笑されている方もいて、メリハリのある環境だと感じました。
7. チャイムがなり、大きな食堂で食券を購入し昼食をとる様子は、中高時代を思い出しました。大阪大学の食堂と比較すると、メニューはそれほど種類豊富でない代わりに日替わりで内容が変わる点において、日々の業務に勤しむ職員のみなさんがたのしめるポイントなのではと感じました。
8. 学食と比べるとやや安くやや多いと感じた。ポークストロガノフというものをいただいたが、サラダもあって充実しており美味しかった。食堂にも活気があって、皆さん楽しく働かれていると思った。しかし財務省の建物はすごく複雑で、一人で来た時には絶対に迷う自信がある。
9. コロナの影響もあり、課内での勤務後の交流なども減ったというお話も聞いたことがありましたが、食堂内の雰囲気は非常に良く、あのような交流の場はどの組織でも働く上で大切なような気がしました。お蕎麦をいただきましたが、とても美味しかったです。
10. 食堂は、阪大の学食と比べてメニューがシンプルで、定番のものを迷わず決めることができました。また、お腹に重くないメニューが多く、食べた後もすぐに動くことができました。また、職員の方が「大学生ですか？」と話しかけてくださり、暖かさを感じた。職場環境については、気が散る無駄なものがなく、仕事に集中できる環境だと思った。
11. 昨年も今年も美味しかったし、あの量であの値段は利用しやすいと感じた。個人的に財務省の魅力として、大きい額のお金を扱い、その仕事为国をよくするためにダイレクトにつながるところだと感じている。官民交流のために出向者が一定数いるということは知ってはいたものの、民間企業からの出向者も意外と多く、驚いた。
12. 財務省の食堂は、去年に引き続き阪大の学食よりもおいしくリーズナブルな印象を受けた。働き方については、使命感を持って仕事に望んでいる方が多く、非常に憧れに思えた一方で、国会対応など、時には過酷な一面があると伺い、厳しさも同時に感じた。

13. 阪大の学食と同じく、おいしいと感じました。一方で、食券を購入する機械などが少なく、不便に感じたので、そういった機械は新た々に導入したほうがいいのではないかと感じました。財務省の労働環境に関しては、廊下が少し暗く感じたので、もう少し明るくしたほうがいいのではないかと感じました。
14. 財務省の建物は古いですが、厨房はそうでもないように感じました。財務省だけでなく、他の省庁の多くの建物も、建築されてからかなり時間が経っているように思います。建て替えや、それに伴う引っ越し作業などはとても大変だろうなと思います。
15. 昨年訪れた際にも同じ印象を抱きましたが、日本の中枢をつかさどっている財務省の方々にはもっともっと良いものを食べて頂きたいと感じました。時短という側面は勿論あると思いますが、日々激務の中日本のことを誰よりも真剣に考えて下さっている官僚の方々の待遇をもっと良くしていかないと、優秀な人材を集めることは難しくなるのでは無いかと考えさせられました。
16. とてもおいしかったです。ただ、財務省の職員と思われる方は、忙しそうにされていて、話しながら食べるということがなくて、その点が少し気になりました。職場環境としては、建物が全体的に暗く、それが働く時の気持ちにも影響すると思うので、もっと民間企業等の、考えられたオフィスを参考にした方が良いのではないかと感じました。
17. 阪大の学食と比べてやや安いメニューが多かった。また、私はラーメンを注文したのだが、ラーメンの中でも価格帯が複数個ある点に財務省の方々の間ではラーメンが人気なのかとも思いました。皆食事は素早く済ませるようにしていた印象があった。
18. ランチのメニューはボリュームがあり、非常にコスパが良いと感じました。定食セットのような、それだけで完結するメニューは大学にはないため新鮮でした。また、建物の構造がかなり複雑でエレベーターも少ないため、部屋の移動が大変だと感じました。他の省庁の建物と比べても特に複雑で階段が多かったように思います。
19. 食堂のメニューや価格帯は大学の学食と似ており利用しやすかったです。また、食事も美味しかったです。メニューによっては入口付近の食券購入器から受け取り口まで遠いものもあるため、並ぶレーンを表示して頂いた方が初めて利用する人にとっては分かりやすいと思います。ドリンクディスペンサーから温かいお茶だけでなく、冷たい水も提供して頂けるとなると便利だと感じました。
20. 財務省食堂でのランチは非常においしかった。阪大の学食と比べると、阪大には「天津麻婆丼」という名物メニューがあるが、財務省にあるかはわからなかった。また行く機会があれば、次はヒアリングをして、名物メニューを食べてみたい。

4.2 水産庁 増殖推進部 裁培養殖課 養殖企画班でのプレゼン

水産庁 増殖推進部 栽培養殖課 養殖企画班への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：（「自分で発表してみて」および「他班の発表を聞いて」の視点で）

1. もっとも最適なモデルを主張する提言において、細分化の効果について指摘を受けました。何度も先輩方の論文や発表を一緒に読んだり、聞いたりしても私にはその視点がありませんでした。理想論では、配合



- 飼料を減らして、低魚粉飼料を増加することが望ましいように思いますが、実際問題、配合飼料には計画的な調達や自動給餌機の使用可能性など、生産者にとって利点がたくさんあるというお話を聞きました。分析結果だけではなかなかはかることのできない要素がたくさん絡んでいるということについて、分かってはいたものの、実際に水産に詳しい人からの具体的な要因を聞くことであらためて気付かされ、政策提言の際に考慮に入れる必要性の強さを感じました。
2. 学生からの質問に対して、正確な回答が用意できていなかったとしても、推測をもとに丁寧に説明して下さったことが非常に印象に残っています。また、部屋のよく見えるところに農林水産省の理念が書かれたポスターが貼られており、常日頃、私たち国民のことを考えてお仕事されているのだと感動しました。
 3. まず、水産庁の方が、このテーマに着目してくれてうれしい、と仰っていたのが印象的だった。飼料の価格の制度を見直すことについては、長い目で見ると飼料の価格転嫁ができるといい、といった現実的かつ納得できるコメントをされていて、庁内でも、問題について深い考えや議論があるのだろうと感じられた。
 4. これまで何度も聞いてきた発表ではありますが、いざ官僚の方に発表を聞いていただくと新たな視点での質問や、それにつられて私達からも新たな疑問が沸き上がってきて、実務を経験している方との会話は刺激的なものだなと感じました。
 5. 中々コアな話題をついた政策提言だなと思っていたが、専門省庁の方々がすでに問題として感じていたところがすごいなと感じた。専門外の事柄についての質問に対して、普段の業務や他の部署の方との情報交換の中から、推測を入れつつ詳しく返答していただけて、知識の幅広さと柔軟な対応能力の高さを感じた。業者ごとにこだわりがあって、餌に関する統一的政策をすることは難しいのかなと感じたが、独自のブランド化を図っているというのも面白いなと感じた。

6. 水産庁の方にプレゼンを聞いていただいた後にコメントをいただいた際、まさにプレゼンした内容の問題に取り組みおられる職員の方からコメントを拝聴することができ、論文発表で聞いていた内容が、実際の現場に携わっておられる方の体験が加わるとこんなにもリアリティが増すものなのかと思いました。
7. 日々政府の動向をニュース等で知る中で、「もっとこうすればよくなるのに」「どうしてこうしないんだ」などと安直に批判してしまう。これは誰しもが経験することではないかを感じるが、実際政策決定を担当されている方の話を聞く中で、実は様々な制約や条件を鑑みたくえであれやこれやと熟慮した結果なのだとあらためて気付かされた。
8. 自分たちの拙い発表を聞いていただいて、申し訳ない気持ちと、真剣に意見を下さってありがたい気持ちでいっぱいだった。養殖を発展させなければならないというのも、エサ代が上昇しているがあまり下がる気配がないのを問題に感じているのも共通認識であった。それに対して水産庁の方でも明確な解決策がないと知り、社会問題の解決の難しさを改めて実感した。養殖に関しては畜産と比較すると規模が小さいため、それだけ補助も小さくなると知った。一方で、畜産と養殖では状況が似ているのに政策決定段階においてはそれほど共同していないのは少し不思議に感じた。
9. 養殖業者や、漁協、飼料メーカーなど様々な主体の意見を考慮しながら政策を立案することの難しさを学びました。AI を用いて魚の様子を観察しエサの量を調節するような事業者のコスト削減支援を行っているというお話を聞き、どの政策分野でも、こういった省人化のための技術を、事業者の高齢化が進む中で、どれだけ早く導入させ浸透させていくかが重要になると感じました。
10. まさに今、養殖は国として取り組んでいる課題であるというお話を現場の方から直接お伺いし、課題感が一致していることを感じた。「魚は食べますか？」という率直な質問を投げかけていただき、魚よりも肉ばかり食べていることを改めて認識した。そのような価値観から変えられるような政策があれば、養殖がもっと進んでいくのではないかと感じた。
11. ゼミで何回も発表を聞いていたもののなかなか理解が難しく分かっていなかった部分も沢山あったので、水産庁の方と意見交換している内容を聞いて、宮里班の発表への理解がさらに深まった。具体的には、なぜ配合飼料が良いのかという点にゼミで聞いているときにはあまりピンと来ていなかったが、水産庁の方の説明を聞いてなるほど、と思った。
12. 水産庁の中でも漁業を中心に取り扱っている方々であったため、非常に専門性の高い議論が行われており、内容についていくのがやっとであった。ただ調べる考えるだけでなく、実務を経験することで研ぎ澄まされる部分があることを強く実感し、これから社会に出ていく上で大切にしていきたいと思った。
13. 畜産の急騰補填金の質問をしていた時に、自らの担当ではないにもかかわらず、「推測になるけれども」と言いながらも、自ら考えながらお答えされていて、日頃から物事を

考えられているからこそ、こういった応答ができるのだと感じ、改めて官公庁の方の優秀さを感じ、印象に残っています。私も日頃からも物事を考え、行動できる人間になりたいと感じました。

14. 自分が精いっぱい勉強して、半年間様々な視点から考えてきたことについて、より詳しい人からご意見をいただき、またそれに対して質問を返せるというような環境は、なんと恵まれたものだろうと思います。研究を進める中で、現場のことをできるだけ知ろうと漁協や養殖業者のお話を伺ってきたのですが、政策目線の話はなかなか伺えなかったのととても貴重でした。自分たちの研究が大したものではないことを痛感している中、申し訳ない思いを抱えながら発表しましたが、真剣に聞いていただけて感謝でいっぱいです。今回の提言ツアーを通して、自分も専門的な知識を持って仕事をしたいという思いを新たにしました。
15. 赤井先生も仰っていましたが、水産庁の方々が少し分野の違う畜産の話題についてもこれまでの知識や経験の蓄積から論理的な推測のもと学生の質問に対応していらっしゃる姿がとても印象的でした。官僚の方々の知識量や熱意に舌を巻いたと共に、自分も将来PJに関わる際に官僚の方々のプロフェッショナルな姿勢をお手本にしたいと感じました。
16. 持続可能にしていくというのは、非常に難しいなと感じました。財務省においては、水産庁に関する予算が3000億で、配合飼料への補助金額が10億から300億円になったと聞いて、規模感に関しての解像度が上がりました。予算の使い道が損失補填に回るばかりで、投資ができていないという点に、課題を感じました。水産庁では、低魚粉飼料の政策について、実際の仕様勝手を考えないといけないと指摘され、確かにそうであるなと感じました。また、全農のような組織を踏まえた水産と畜産の構造の違いを知れてよかったです。根本的に解決するにはどうすれば良いかを考えていきたいと思います。
17. やはりこの一年自分が関わってきた論文に対して実際に業務に当たられている方々からお褒めの言葉などをいただけたことが嬉しく感じる。やや社交辞令的な部分はあるかもしれないが、自分たちの仮説やヒアリングを通じた政策提言が的外れではなかったことはそれなりに自信に繋がったのではないかなと思う。特に印象に残っていることが、職員の方への質疑応答で、担当外であった分野に関しても推論を構築できるほどに日々の業務やその周辺分野に取り組まれていることを実感したことである。
18. まず班員の発表を見守る立場として、2、3年生が堂々と発表や議論を出来ていたことに安心しました。養殖で使う餌について、実際の養殖業者の方がこだわりを持っているために統一した規格を示すことが難しいという事実を初めて知り、非常に勉強になりました。また、担当の方からの逆質問を聞いて、様々な課題を検証すると最終的には特に若者の魚離れが深刻であるという現状に辿り着くことを実感しました。さらに、水産庁の管轄以外の、農業系での事例についての質問にもきちんと答えてくださっており、関連分野まで視野を広く持って仕事をされていることに気付きました。

19. 養殖の問題は「日本漁業の衰退」や「日本の伝統的な食文化の継承」「食糧安全保障」「海洋環境保全」といった様々な問題と複雑に絡んでいるので非常に難解だと感じました。今回、「日本人の魚の需要量が増加しない限り、養殖事業者の経営環境が根本的に改善されることはない」とお伺いし、日本の養殖業が非常に厳しい状況にあることが分かりました。また、配合飼料を生産する餌会社自体も魚粉価格の高騰が原因で経営不振に陥っているのは初耳でした。そのような状況下で、自動給餌器の導入や複数事業者での餌の共同購入など、養殖業者自体も様々なコスト削減策を講じていることを学びました。「生産者が価格転嫁出来ない仕組みになった理由を考える必要がある」とお伺いしましたが、養殖業者がコスト削減の努力を重ねている以上、我々消費者も価格転嫁を一定程度受け入れる必要があるのではないかと考えます。
20. 畜産業との政策の違いを教えてもらうこともでき、知識の幅が広がった。水産庁職員の方からの逆質問で「みなさんはどうすれば魚を買いますか？」という質問があったことから、やはり水産、養殖の問題は深く、解決が難しい問題であると改めて感じた。

4.3 総務省自治行政局住民制度課マイナンバー制度支援室でのプレゼン

総務省自治行政局住民制度課マイナンバー制度支援室への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：（「自分で発表してみても」または「他班の発表を聞いて」の視点で）

1. マイナンバーを普及させるために、先輩方が分析を通じて得た普及阻害要因や政策提言について、担当の方はすでにお気づきで、その点において実際に政策を打ち出し、準備しているというお話を聞いて、やはり私たちが考えることのほとんどは、専門家である総務省で働く人々が既に目をつけている視点だということを改めて気付かされました。
2. 私たち学生の意見に何度も共感して下さったことに感動しました。すでにマイナンバーカードの普及率は高いという事実はありながらも、これからどうしていくかという先の議論に繋がっていた点が非常に印象に残っています。
3. マイナンバーカードの普及については、今や省の焦点を置く政策ではないながらも、普及についての政策提言に職員の方が積極的にコメントをされていて、政策提言の内容をさらに応用してくれるのではないかとという雰囲気を感じた。また、マイナンバーの活用について、理解していたよりも大規模で推進的な計画がすでに行われているようで勉強になった。
4. マイナンバーカードの普及率が徐々に上昇していき75%の人が取得した現状において、私たちの班が研究した手法はもう通用しなくなってきており、新たな試みとしての細分化された層へのアプローチが重要であるというのは疑いようのない事実だと思いますが、そのためには想像もつかないほどのタスクがあると実感しました。それを実行していくのが行政の役目ではあるが、その負担は計り知れないほど大きなものだと思います。その政策等もまた研究内容にしたいと感じました。
5. 発表当日までにマイナンバーを取り囲む環境は大きく変わり、普及率も大幅に上昇したわけだが、それを踏まえた上で門前払いするのではなく、今後の更なる普及に応用できると、議論を深めていっていった部分が、とても思慮深いなと感じた。



6. 総務省とデジタル庁の方がプレゼンを聞いてくださり、またアドバイスをくださいましたが、お二方共からそれぞれの観点からのコメントがあり、総務省とデジタル庁のそれぞれでマイナンバーカードの普及に粉骨砕身されていることを感じました。
7. 実際にマイナンバーカードに近くで関わりを持たれている方にお話を伺えて、いろいろ学びが多かった。マイナンバーカードの広告に関して"ワイドショーに取り上げられた方が広報としては効果がある。政府に対してそもそも不信感があると、広報しても受け入れて貰えないため、第三者がアピールした方が受け入れられやすいケースもある。"というご意見が印象に残っている。たしかに、有名人がそれに対するフィードバックを世の中に出せば、メディア SNS にも取り上げられ、より多くの人々がそれについて関心をもち、さらには"この人がそういうなら安心だ"などポジティブな反響も広がると感じた。
8. マイナンバーが駆け込み需要などでかなり普及してきた中で、それをどう活用していくかはこれからの段階なのだと思った。しかし、スパイファミリーとコラボするなど今までの国としては考えられない革新的な取り組みだと思う。これからどうなっていくのか非常に楽しみだ。
9. 総務省とデジタル庁が、マイナンバー導入、利活用を進める上でどういった役割分担をしながら進めているかについて学びました。ワイドショーで取り上げられたときに交付率が増えたという、広報の難しさに関するお話は、政策の最前線で国民の理解を得ながら政策を立案されている職員の方だからこそ聞けるお話で、今後のメディアとの接し方について改めて考えさせられる機会にもなりました。
10. マイナンバーカードは論文執筆中にも情勢が変化し続けていたため、実際にマイナンバーカードの普及に携わっている職員の方々のお話をお伺いできることは、最もタイムリーだと感じた。最終的に、マイナンバーカードは義務化へと向かっていく流れがあるように思えるが、国民を説得するロジックを明確にすることの難しさを感じた。国民として、義務化についてより考えていかなければならないと感じた。
11. 研究をしている中でマイナンバー制度の検討は総務省とデジタル庁が協力しながら行っているくらいにしか思っていなかったが、この提言ツアーを通してデジタル庁が企画立案をして、総務省がそれを実行するというように棲み分けがはっきりしているということがよく分かった。どの指摘も大変勉強になったが、特に、これからはまだマイナンバーカードを取得していない残りの 25% にアプローチしていかなければならず、取得していない要因は今まで以上に人それぞれになってくるので個別のアプローチが必要となるというお話が印象に残った。
12. 実際の戦略や実行を行っている方からの質問や意見は、財務省の方とはまた角度が違っており非常に勉強になった。自分たちが執筆する中でぶつかった壁と同じような悩みを抱えていることもあり、非常に難しい問題に立ち向かおうとしていたことを実感した。特に、「政府の広報はどうしてもきれいごと聞こえてしまう」という発言には、

非常に共感した。また、これからの普及促進政策がこれまでのものとは全く異なり、きめ細やかな方法になるという点には驚きで、今後の動きに着目するとともに、自らの知見を深めて行きたいと思った。

13. より便利に、実用的にすることでマイナンバーカードの普及を進めていくことの難しさを改めて感じました。また、広報の面に関して、アニメとコラボすることでより若者の認知率を上げていく取り組みも、大変新しいと感じると共に、若者である私の実感ベースでも一定程度効果的なものなのではないかと思い、興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。
14. 不参加
15. 自分にとって、自らのチームで考え抜いた政策を、最も提言したい相手に提言できる機会があるということで、ある意味ではこの場のために研究を重ねてきたと言っても過言では無いような貴重な機会で、実際の政策立案者に成果を発表する時間は夢のようでした。総務省・デジタル庁の方々も、自分達の提言を無碍にすること無く真摯に向き合って下さっている様子が伝わり、感動しました。マイナンバーカードを普及させることの意義にも同調してくださり、FBも丁寧かつ示唆に富んだ内容で本当に貴重な機会を頂けたと感じています。この場を借りて官僚の方々や赤井先生に御礼を申し上げたいと感じました。
16. デジタル庁が企画立案して総務省が施行するという関係や、一部の自治体で先行的にやることで定量的なデータを取得するという手法など、興味深く感じました。ワイドショーで取り上げられたのちに、国会答弁や申請件数などが増加した（肌感覚）というのも面白いなと思いました。まさに総務省の所轄ですが、メディアの使い方や届けたい年齢層など、学ぶことがあるなと感じました。
17. 個人的に最も印象に残ったことは、マイナンバーカードの普及に際して明確にターゲット層を意識した政策が行われていたことである。役所に対してやや固めの印象を抱いていたため、若者向けの政策を意識的に取っていたことに驚いた。
18. 担当の方の、「マイナンバー制度とマイナンバーカードがごちゃ混ぜになって議論されている」というお話を聞いて非常に納得しました。私自身もテレビやネットニュースを見る中でそれを感じたことがあったため、その整理をすれば状況の改善に繋がるのではと感じました。また、申請の受付と広報やその他の政策を行なう省庁が分かれているのはなぜなのか疑問に感じました。
19. マイナンバーカードへの理解を得ることや広報活動の難しさに関するお話が印象に残りました。政府が記者会見や公式ホームページ、CMで正確な情報を発信しても国民には届きづらく、メディア等の意見の方が受け入れられやすいことを知り、政府主体の情報発信の難しさや苦勞を感じました。現在マイナンバーカードは交付促進から利活用の段階に移行していますが、世間では「行政が提供するITサービスは使いづらい」といった声が散見されます。多額の予算をかけてサービスを整備しても利便性が低けれ

ば、デジタル化の効果は半減してしまいます。民間企業と連携して、より使いやすいマイナンバーカードが早期に実現することを切に願います。

20. 「普及」から「利便性向上」というフェーズに変わっているというお話を聞いて、確かにその通りだと感じた。しかし、国が掲げる「普及率 100%」という目標は達成が難しく、そのためにはより政策が必要だということも感じた。

4.4 国土交通省 道路局 国道・技術課道路メンテナンス企画室でのプレゼン

国土交通省道路局国道・技術課道路メンテナンス企画室への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：（「自分で発表してみても」または「他班の発表を聞いて」の視点で）



1. 優秀なOBは既に社会に求められて働いている可能性が高いため、簡単に求めているOB人材は手に入らないという、OB人材の派遣についての指摘がどんな提言においても当てはまる、鋭い指摘で、私自身とても納得し、印象に残りました。



OB人材は基本的に仕事を辞めて暮らして仕事があれば受けてくれるという考えは安易なのだとことに気付かされました。

2. よく調べられているとお褒めの言葉を頂けたことや、人材不足や予算不足という課題設定が国土交通省の認識と同じであるというコメントをいただけたことが嬉しかったです。特に、ヒアリング調査を入念に行ってきたという点に気付いて下さったことに感動しました。しかし、OB人材については既に話題に上がっているものの、人材の確保が難しいという理由から、実現可能性が低いというご指摘を受けたため、今後はこのような視点を大事にしていきたいと思いました。

3. まず、発表を行った部屋が先進的で驚いた。発表後のコメントでは、予算不足、OBの人材不足、自治体の規模ごとのキャリアパスの実現性などについて、かなり現実的な意見をいただいて、実際の政策実行の難しさがよくわかった。しかし、私たちの班の提言も有力だと言ってもらえる部分もあり、嬉しく感じた。また、細かな数字のチェックまでしていただき、複数の担当職員の方がここまで真剣に提言と向き合ってくれたことに感動した。最後に、職員の方々が、インフラや街づくりについてどのような将来のビジョンを持っているのか聞くことができ興味深かった。
4. こちらも何度も聞いてきた発表ですが、やはり官僚の方からは新たな視点からの質問が出てきたのが印象的でした。特に費用の額が間違っているというのは実務を経験している方からしか出て来ようのないものであり、これまでずっと気づかなかったものなので大変印象に残りました。
5. どこの道路にどれだけ補助を出すのか、その道路の重要性など評価基準が難しいことや、道路の管理主体が様々であることがスムーズなインフラ改善の妨げになっているなど感じた。国と県と市町村の密な連携が必要だと感じた。
6. 国土交通省の建物の中で、国土交通省の職員の方の前で発表するなど想像もできないようなことだったのでとても緊張しましたが、胸を張って発表されている先輩方の姿を見て、自分も精一杯プレゼンをやり遂げることができました。一分の隙もないほどに綿密に組み立てられていると感じていた先輩たちのプレゼンも、例えば OB 人材の中でも優秀な人材はすでに雇用されているといった事実のように、実際にその課題に取り組まれている方でないとは得られない視点からの指摘を頂き、まだまだ考えられる可能性はあったのだと気づかされました。
7. 「5年に1度のメンテナンス」の話をすごく単純に飲み込んでしまっていたが、「全国の橋梁70数万件のうちほとんどが自治体管理だから、毎年のメンテナンスは現実的ではない」という考えのうえで定められた期間なのだと改めて知った。こうして一つ一つのことが、事実や実現可能性を考慮した上で決定されているからこそ、提言をするときにはだれが、いつ、どのように、など現実性と具体性を兼ね備えたものがアイデアとして重要だと改めて感じた。
8. まず部屋がすごかった。真剣に考えていただいているためか、結構厳しい意見が多いことに驚いた。OB人材について働きたい人はそもそも働いていることや、そもそも地方では人材が足りないということは確かにその通りだと思った。橋梁メンテナンス全体ではかなりの予算があるが、一つ一つで見るとほとんど予算がなく、ミクロマクロ両方の視点を持つ重要性を感じた。
9. 知識の差はあるものの、自分たちが数ヶ月かけて調べてきた政策分野に関するについて、最前線で働かれています方と色々議論できたのは大変貴重な機会になりました。xROADという施設の点検結果をデータ上で管理するシステムについてもご紹介していただき、今後ますます橋梁の状況が見える化され、効率的に補修を進めていけるように

思いました。職員の方が、自分たちの発表や意見をすごく尊重してくださり、あのような姿勢は今後社会人になっても大切にしていきたいと思えました。

10. 現場の視点から貴重な指摘をいただいた。例えば、OB 人材の活用についてである。OB 人材は意欲的に橋梁のメンテナンスに携わってくれるものだと考えていたが、彼らが引退してからも橋梁のメンテナンスに携わる理由が少し弱かったように感じた。また、技術者が 1 人しかいないような自治体の技術力をあげることの難しさを改めて認識した。そのような自治体が自立してメンテナンスを行えるような施策でないと、根本的な技術力の向上が図れないというような指摘を受け、市町村全体の技術力の向上という視点だけでなく、一つ一つの自治体の技術力向上という視点も考えなければならない現実の政策の難しさを感じた。
11. まず学生のためにあれだけの職員の方が来てくださっていたことに感激した。指摘の中で、支援のメリハリが大事だという言葉が印象に残った。取り組むべき物事にメリハリをつけるというのは、官僚でなくとも社会人になってから重要な姿勢だと感じたので、是非覚えておこうと思った。
12. 実際に道路のメンテナンスや地方のインフラに関わっている方の意見を伺うことが出来、非常に深い学びとなった。発表に対するコメントや質問も鋭く、特に、「できる OB 人材はすでに民間で働いているのでは」という意見には共感した。しかし、それに対しても更なる考察が可能であり、自分もこれから考えてみようと思った。
13. 道路の官民連携が進まない理由をお伺いしたときに、一つの会社にまとめて発注してしまうということは今まで請け負っていた他の企業が発注を受けられないということだから民間側から不満が出てしまうことにもつながるというお話が大変印象に残っています。行政のコストを下げつつ、民間のビジネスチャンスを増やすことができると短絡的に考えてしまっていた部分もあった私だったのですが、まだまだ思考が浅かったのだなと反省いたしました。より深く、より広く、物事を多角的に捉えられるよう、今後の学生生活を過ごしたいと思いました。
14. 不参加
15. とても綺麗な部屋で学生の発表を聞いて下さり、国土交通省の方々がこの時間を有意義な時間と捉えてくださっていると感じ、学生目線でとても嬉しく感じました。職員の方々も人数を沢山割いて頂いており、官僚の方々が対等な目線で学生の発表に向き合っていて下さっている様子に胸が熱くなりました。
16. 道路に対する予算が多いなかで、多様な示唆を得ることができました。政策に対するコメントで、できる OB は民間で働いているというものがあり、そのような別の場所を見るという意識を持たなければと思われました。一括発注やジョイントベンチャーなど、さまざまなやり方を学ぶことができ、今後の糧としたいと思いました。
17. 個人的に最も印象に残ったことは、交通土木インフラに対してそれを利用する人の生活のことを第一に考えていると実感したことである。橋や道路など様々な交通土木イ

ンフラがお話に出てきたが、常にそれを利用する人が困らないようにという文脈で語られていたことが改めて国家のために働かれているのだなと感じた。

18. 行なった提言に対して、認識や理想は同じであるとしつつも現実は異なり難しいというコメントをされているのを聞いて、やはり私たちが議論したことは既に議論されており、私たちが現実を正確に知ることはかなり難しいということを実感しました。また、お話を聞いて、橋梁等のインフラは1つあたりの予算が大きいために、修繕等も慎重にならざるを得ないのだと感じました。
19. 道路メンテナンスに関する予算は国、地方共に不足していることに衝撃を受けました。自班の論文は自治体の予算不足を解消するための政策を提言しましたが、自治体からの補助希望額が増加すればする程、国も予算不足に陥ってしまうと伺いました。早期修繕が必要な橋梁のメンテナンスに手一杯で予防保全まで手が回らない現状を知り、この国のインフラ老朽化問題は非常に深刻であると感じました。予防保全への切り替えに20年以上かかるようでは、老朽化の進行スピードに対応しきれないと思います。財政に負担をかけたとしても、アメリカのように大々的に予算を確保して必要なインフラに集中的なメンテナンスを行うべきではないかと考えます。
20. 橋梁班に所属していたので、国土交通省の職員の方々のご意見、質問は非常に勉強になった。特に、これまで橋梁について調べてきたので見えていると感じていた部分で実は見えていなかった部分があったこと、そもそも調べることができていなかった部分があったことなどを知ることができたのは非常に貴重な機会であった。実際の政策提言は様々な情報を統合したうえで為されると思うので、調べすぎということはないのだなと感じた。

4.5 今回の政策提言ツアー全体への感想および、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場（中央省庁、地方自治体、その他）やそのあり方についての意見・希望

意見交換の場（中央省庁、地方自治体、その他）やそのあり方についての意見・希望

1. 中央省庁に入るだけでもなかなかできないにもかかわらず、霞ヶ関で働く、いわゆる官僚の方たちと実際にお話し、意見交換ができるというのは本当に貴重な経験で、知識や内容の面だけでなく、官僚の方々の語彙量や表現の仕方といった言葉の選択についても学ぶことがたくさんありました。話し方についても、どの省庁の人々も短い時間でまとめて簡潔に論理的にコメントされていて、想像はしていたものの、実際にその光景を目の当たりにして改めて感銘を受けました。
2. 普段はお会いすることができない、政策決定を行う担当者の方々にお時間をお取りいただき、私たちのプレゼンに対してご意見をいただいたことに、非常に感動しました。また、意見交換の際には、学生が一方向的に質問するという形ではなく、担当者の方々からも「ここ少し気になったんだけど…」とご質問をいただき、実際の「議論」になっていたことが嬉しかったです。このような貴重な機会をくださり、本当に有難うございました。
3. 全体を通して、実際に政策を決定している方々は、我々の何歩も前を見ているのだとわかり、我々には太刀打ちできないのではと思われることもあった。しかし先輩方が、我々の視点や大阪で行った数多くの調査に基づく意見を堂々と話す様子を見て、ゼミ生の活動も大切なのだらうと感じた。発表や意見交換の後、ゼミ生から職員の方に一般的な自由な質問ができる時間が、特に職員の方の本音を聞いているようだったのでよかった。また、長時間外でのデモ活動の声が聞こえているような場があり、省の職員の方が毎日このような環境下で仕事をしていることを思うと、国民の生活に直結する責任の重い仕事なのだろうと考えさせられた。
4. 私達の考えた政策と実際に決定されている政策との間の乖離は小さいものであることを知り嬉しく感じました。しかしそれと同時に、私たちと実際に政策を決定されている方との間では、交わされている議論の時間や濃度、回数が圧倒的に異なるのだろうなということも感じました。
5. 普通なら入れない場所に入ることができ、国の中枢業務に携わるの方々の貴重な考察をお聞きすることができ、大きな学びと共に、かけがえのない経験ができたと思います。来年もし同様な機会がいただけるなら、時間をとってよかったと思っていただけるような分析・提言をしたいと思います。

6. 普通では入ることさえできないような省庁の建物の中で、さらにプレゼンをしてFBまでいただけるという貴重な経験でした。自分たちの提言が実際に提言対象まで届くんだと思い、これから自分たちが挑んでいく政策提言と論文執筆に、なおさら期待と情熱が入りました。また、今回は私たちのプレゼンを聞いてそれに対するFBをいただくという形でしたが、逆に省庁の方々がどんな環境で、どんな業務や案件に携わられているのかというプレゼンをまた機会があれば聞いてみたいと思いました。
7. まずは、省庁での発表、意見交換という一生過ごすうちでもないような経験をさせていただけたこと、ありがとうございます。ただ発表して意見をいただいて、というのではなく、職員の方から様々お話を伺う中で日々の仕事や日本の政策がいかにして作用しているかなどたくさんことを学ぶことのできた、非常に得がたい経験ができました。事実や実現可能性など、私たちがニュースで見る情報では知りえないところで様々な情報が行き交い、日本の未来に必要な決め事が行われていることを実感出来ました。
8. 今回の政策提言ツアーは去年とはまた違う見え方だった。去年は単純に国をよくしようと働いている方のかっこよさが印象的だったが、今回はその難しさのようなものが見えたと思う。社会問題は解決策がすぐにはないものばかりでそれに対しどうアプローチしていくか、頭を悩ませることが多いと感じた。意見交換の場としては、論文を書いた上で、実際に政策を作る方々に意見をいただくことで、考え方や問題の捉え方の違いについて知ることができるとてもいい機会だと感じた。なかなかハードスケジュールだった。
9. 実際に該当分野で政策を立案している方と対面で議論することで、自分たちが考えていたことと実際とのギャップについて学んだり、足下の当該分野に関する政策の状況について学んだりすることができるのはもちろん、霞が関で働く職員の方が感じている仕事のやりがいや、職場環境等についても色々知ることができる大変貴重な機会になりました。フランクに交流できるディナーの機会もセッティングしていただき、このような社会人の方と一緒に、今後日本を少しでも良くしていきたいと思える1日になりました。
10. 私たちが考えている政策はなかなかうまくいくものではないということを改めて痛感した。私たちの発表を聞いて、職員の方々はすぐに施策の実行をイメージし、そこでぶつかる数多の課題をすぐに思い浮かべて伝えてくださっているように感じた。理論的な部分ではある程度、施策の策定まではたどり着けても、実行する段階において見つかる問題点はなかなか私たちでは考えることが難しいと感じた。しかし、これから社会に出るうえで、そのような現場の視点で考える力は必ず必要だと思うため、たくさん学びを得ることができた。
11. 1日で4省庁も回るといって本当に貴重な機会をいただき、ありがとうございました。私たち学生は1年かけて研究しても正直考えて終わってしまうのですが、官僚の方は実際に決定まで下せるということで、改めて官僚という仕事のやりがい、大変さという

のを実感しました。だからこそ、実行するときの障壁など私たちにはない視点で意見をくださったので、どの省庁でも勉強になりました。来年はテーマ次第ではありますが、是非この2年で行かなかった省庁に行けたらな、と思います。

12. 今回のような実際の政策決定を行う担当者、特に国の政策を動かす方々からアドバイスを貰い議論をする機会は非常に貴重であると感じた。調査やヒアリングだけでは分からない生の声や本音をうかがうことが出来、勉強になるとともに今後のゼミ活動にも大いに活かせると感じた。要望や意見がほとんどないくらい貴重で、勉強になる経験であったが、強いて言えばよりゆっくり議論が出来たら、更なる学びに繋がったのではないかと考えた。官僚の方が忙しいことは承知であるが、よりよい研究のためにはできたら理想的である。
13. 官僚の方は総じて、物事を深く考えられている方が多い印象を抱きました。それは常に省庁内の調整だけでなく、常日頃から、議員や民間企業の方ともたくさん議論を重ねていらっしゃるが故のことなのだろうと考え、改めて官僚の方々の聡明さに驚かされました。また、少しでもこの日本をよくしていきたいという気概と体力を持ち合わせていらっしゃる方が多い印象も抱きました。日々の忙しい生活で忘れてしまいがちな仕事にかける思いを私も忘れずに生きていきたいと思うようになりました。
14. 意見交換の場では、大学生だからと手加減せずに、もっと多くの点を指摘していただくとより参考になると思います。私としてももっと現場のお話を伺い、政策の実行過程を知りたいので、今後もこのような機会を設けていただければと思います。
15. ISFJやWESTのような論文研究発表会は懸賞大会という面で勿論成果の発表の場として重要だと思いますが、個人的に成長の機会やワクワク感、緊張感は政策提言ツアーの方が強く感じています。実際に政策を立案している官僚の方々に提言する機会の貴重さは本当に言葉では言い尽くせないものがあると感じており、赤井先生のお力添えの賜物だと感激しております。今後も官庁訪問の機会が頂ければ、私たちは勿論、後進のためにも良い経験となると考えます。改めてこのような機会を頂き、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。
16. 実際に予算を考慮し、政策を考案策定している、現場の人と話せて貴重な経験となりました。意見としては、より個人間で話す時間があると良いなと思いました。時間がタイトなことは理解していますが、休憩時間等で、よりオフレコであることを活かした場を作れると良いなと思いました。
17. 個人的に最も印象に残ったことはこれまでの回答欄でも触れてきたように「日本のため」という思いが日々の業務や我々学生へのご対応にあふれ出ていた点である。どの省庁の方も必ずと言っていいほど日本のためと言う文脈でお話をされていた。役所の仕事は時としてマスコミや SNS 等で批判されるものの、実際にそこで働かれている方々が熱心に仕事を行っていることを目の当たりにできたという点で今回の政策提言ツアー企画は非常に貴重な機会であったと認識している。

18. 実際に政策を実施している方々に対して自分達の考えた政策を発表するという非常に貴重な経験をしているのだと実感しました。そして、そこで働いていないと見えてこない現状を知ることができることも大きな経験になると感じます。今回は去年よりも班の数が多かったこともあり、昼食が非常に慌ただしくなったため、可能であればもう少しゆっくり財務省のランチを味わいたかったです。もし可能なのであれば、財務省の方と担当省庁の方が同時に発表を聞いてくださる形であれば、こちらの慌ただしさもかなり解消されるのではと感じます。
19. はじめに、今年度も対面で政策提言ツアーを受け入れて頂いた財務省、水産庁、総務省、国土交通省の皆様へ深く感謝申し上げます。政策提言ツアーに参加するのは今回で最後となりますが、毎回私たちの論文に対して官僚の方々からフィードバックを頂けるのは特別な経験だと感じております。誰が費用負担するのか(政府や民間、国や地方)、どのような基準でどの分野に予算を優先的に配分するのか、政策の効果が現れるまでの時差と初期費用の関係をどのように考えるのか、それぞれの主体が果たす役割は何か。昨年度もご教示頂きましたが、これらの視点が実現可能な政策を考える上で重要であることを改めて学びました。提言ツアーでの学びを社会に出てからも活かしていきたいと考えます。最後に、今回の政策提言ツアーを企画して頂いた赤井先生に深く感謝申し上げます。
20. 省庁の方々とは学生と同じ目線に立って、政策提言を評価していただき、このような機会を与えていただくことは非常に稀有なことだと思います。その評価も、まずは論文の執筆への労いの言葉から始まり、「論理的で素晴らしい」、「勉強になります」などお褒めの言葉もおっしゃっていただきました。また、政策の評価もしっかりとしてくださいました。このような機会をいただくことができ、赤井先生および関係者の皆様には感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

4.6 阪大(東京) オフィスの印象

1. 初めて、阪大オフィスというものに行きましたが、思っていたよりシンプルで静かな空間でした。私は参加が遅れたため、1人でオフィスに行きましたが、職員の方はとても親切でした。



2. 普段見慣れたワニ博士や阪大のカフェテリアに設置されているようなTVモニターなどが東京でも見ることができ、安心しました。どのような時に利用できるのか、個人でも利用可能なのかについて、調べてみたいと思いました。
3. 立地が最高で、オフィスの中もとてもきれいだった。今回はありがたい使い方をさせてもらったが、他に具体的にどんな用途で使われている場所なのか知りたかった。
4. まず、国公立大学である大阪大学が東京に、それも霞が関の近くにオフィスを持っていることに驚きました。私も就活で近くに来た際は個人で利用してみようと思いました。
5. ビルの一室にあるとは思わず、焦って迷ってしまった。内装はシンプルながら洗練されていて、ここでどんな活動が行われているのだろうと少し気になった。
6. 霞が関の中にまさか阪大のオフィスがあるとは思いませんでしたが、中にはワニ博士のぬいぐるみもあり、阪大オフィスと書かれたボードもあって、ほっとしたような気持ちになりました。
7. 東京にオフィスが存在すること自体存じ上げなかったもので、訪問できていい経験になった。もっと阪大生が知っていかせたらいいのと思った。
8. 荷物を置かせていただいただけなのであまりよく分からなかったが、ビルの中にあり、霞が関に非常に近いということで産学官の連携において大きな役割を果たしているのだと思う。
9. 霞が関に用事がある場合には最適な立地で、大きな荷物を置くのに非常に助かりました。また機会があれば利用したいと思います。
10. キャンパスではなくオフィスという言葉通り、会社のような雰囲気があった。まだ、しっかりと利用したことはないが、東京に滞在しているときの拠点として訪れることが楽しみになった。
11. 霞が関のメイン通りの良い立地にあると感じた。ガラス張りで沢山の団体が入っているビルで、東京らしい建物だと思った。

12. 昨年も訪問したため、今年で2回目であったが、非常にきれいで使いやすいと感じた。阪大の学生ならだれでも利用できると思うので、積極的に利用していきたいと思う。
13. 好立地な場所に、コンパクトなオフィスがあるという印象を受けました。一方で、阪大生に、東京オフィスがあることはあまり知られていないような気がしているので、阪大の東京オフィスがどのような役割を果たしているのかをしっかりと阪大生に伝える必要があると感じました。
14. このように便利な場所があるのに、学生には全くと言っていいほど知られていないのがとてももったいないと思います。
15. 昨年も政策提言ツアーの際の拠点として使わせて頂き、今年も相変わらず綺麗かつ好立地な場所です。有難いと感じました。阪大生である間は、あるいは卒業後も個人的にも利用して大丈夫なのか気になりました。
16. とても立地が良いなと思いました。省庁への距離が近く、様々な活動がしやすいというふうに思いました。また、オフィス内も綺麗に整頓されており、会議もしやすそうであるなと思いました。
17. やはり、きれいであった点が印象に残っている。やや上から目線ではあるが、霞ヶ関にあのようなきれいなオフィスを構えているということで阪大の株が少し上がったように感じる。
18. 非常に綺麗で居心地が良かったです。社会人になって利用する機会はほとんどないと思いますが、大阪以外にも、本当に困ったら頼れる場所があるというのは心強いと思います。
19. 駅や省庁からのアクセスも良く、きれいで使いやすかったです。東京訪問時に阪大生が安心して利用できる設備があるのは非常に心強いです。
20. 去年も使わせていただいたが、去年と変わらずきれいなオフィスであると感じた。東京駅からのアクセスもよく、非常に使いやすい。

5. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント

2013年度に政策提言論文の全国大会にゼミ論文をエントリーし、その成果を実際に霞ヶ関での政策担当者に見てもらいコメントをもらうという「政策提言ツアー」を開始して、今年2022年度で10年目となる。毎年、財務省をはじめ、政策に関わる担当の省庁のみならずには、大変お忙しいところ、若い学生のチャレンジの応援という形で、お時間を作っていた。感謝したい。実際に政策を設計している担当者と意見交換が出来る機会があることは、論文執筆の大きなモチベーションにも、また、今後、社会・政策のあり方を考える上で、貴重な体験となる。この体験をした学生が、社会に出て、社会問題に直面したときに、民間部門であれ公的部門であれ、この経験が役に立つことがあると確信している。それでこ

そ、企画者および対応していただいた皆様への恩返しとなるのである。この企画の継続には、時間も苦勞も多いが、学生の成長があつてこそ、やりがいがある。継続は力なり。